

お母さんは、不便な中で、私達に食事の用意をしてくれました。

私は、この震災を体験して、大切なことに気がつきました。1つ目は、水や電気の大切さです。あたりまえだと思っていたことができなくなり、その大切さがよく分かりました。

そして2つ目は、家族の温かさです。家族がいることは、どんなに幸せか。どんなにうれしいことか。これ以上良いことはないと気がつきました。

私はこれからも、震災で気づいた大切なことを忘れずに、生きていきたいです。

あの日

櫻井 杉乃
柿岡小学校6年



あの日、私は、2年生でした。その時は、5時間授業で帰りの会をしていました。そのときです。突然、教室にあるスピーカーから警報が鳴り、それと同時に床が大きく揺れました。私はとっさに机の下に隠れました。私の席の隣の本棚から沢山の本が落ちてきて、本棚も倒れてきそうだったので、とても怖かったです。揺れはいつになっても収まらないような気がしました。ようやく揺れが収まり、教室から校庭に避難しました。みんな、パニックになっていて、中には泣いている人もいました。

帰る時、道にブロック塀が倒れていたり、私の家の入口に段差があつたりしてびっくりしました。陥没している所があつてびっくりしました。

家に帰ると、家族全員が無事だったので、とても安心しましたが、まだまだ余震が続いていました。夕食は、ポットに残っていたお湯でカップラーメンを食べました。お腹がすいていたのでとてもお

いしかったです。夜は、みんなで一緒に布団を敷いて、すぐに避難できるようにそばにくつを置いて寝ました。寝ている時も余震が何度もあって不安でたまりませんでした。今、大きな地震がきたらと思うと怖くてたまりませんでした。

4年も前の出来事ですが、そのときの恐怖は今でもはっきり覚えています。後でこの地震で多くの方が亡くなつたことを知りました。地震を含め自然災害は、いつどこで起きるか分かりません。ただ、その時に適切な判断で多くの命が救われたことも知りました。私はまだ小学生なので出来る事は限られています。しかし、これからいろいろなことを勉強して、自分のできることはしっかり行つていきたいと思います。自分の命は自分で守ること、さらには周りに困っている人がいたら進んで手助けをしていきたいと思います。

震災の日

高橋 音々
小幡小学校6年



3月11日、私が2年生の時に東日本大震災が起きました。その時はみんな、帰る準備をしていました。急にゆれ始めて、みんなびっくりしていました。すぐに担任の先生からの指示があり、みんなすぐ机の下にかくれました。中には、こわくて泣いていた友達もいました。校庭にひなんをする時に、花びんの水がこぼれています。すごくわかったです。

ひなんした後は、みんなほつとしていましたが、次に地震がいつ起こるか分からないので、すごく不安な気持ちでいっぱいでした。その後はみんなで下校しました。と中で、車で母がむかえに来てくれて、少し安心しました。

家に帰ると、家のかわらがおちていて、食器などが倒れて食器がわれていました。その日はこわくて家でねむれず、母と兄と私は車の中でねました。よ震が起こるたび目が覚めて、よくねむれませんでした。

数日後、犬の散歩で母と中学校に行きました。中学校の水道はなぜか使えるので、水は中学校の水道水を使いました。コンビニにいっても全く何も売っていないなくて、困りました。家にあるもので過ごしました。地震があって、すごくこわい思いをしました。死者もかなり出たそうです。もう、そんなことがないように地震対策を考えたいです。

心の叫び

渡部 真梨子
石岡中学校3年



4年前の3月11日私は、福島県の三春町の中妻小学校、6年1組の教室で帰りの会をやっていました。突然の揺れに驚き、机の下に隠れました。その後もひたすら揺れが続いていました。その後先生がテレビをつけると津波の映像が流れています。たくさんの人や車、家が流されていく様子を見ています。みんな無言でした。この時はまさか自分の身にも大変な事が起こるとは夢にも思つていませんでした。

次の日のテレビで東京電力原子力発電所の3号機が爆発したことを知りました。最初は何の事だから全く理解できませんでした。原発の近くに住んでいる事すら知りませんでした。突然連絡網がまわって来て、3月12日から学校が春休みになりました。

私のまわりの大人の人は、 Chernobyl のこ

ともあり、放射能の恐ろしさについての知識を持っていましたので、「あぶないから避難しよう。」と言いました。私の場合は祖母が石岡市に住んでいて、線量を計ったところそれほど高くはなかったので、とりあえず急いで一次避難として家族、親せきの人達がみんな石岡に来ました。

そして4月になり、私たちの住む町はギリギリ避難区域からまぬがれる事ができたので6年生17人全員で始業式を迎える事ができました。マスクをいつも着用し、外へ出る時間も限られました。もちろんプールもできず、土や草花や雪を全くさわる事ができなくなりました。給食はあったのですが私の母は心配だったので弁当をつくって持たせてくれました。換気ができず夏は暑くてつらかったのを覚えています。しばらくして、除染がはじまりました。校庭には測定機が置かれ、校庭の土の表面はすべてがされ、その近くにはロープがはられ立入禁止の札が立てられました。今だに除染は続けられています。6年生も無事に終わりました。中学校への入学を機に私は石岡へ自主避難することになりました。幼い子どものほうが内部被曝を受けやすいという理由で両親が決めた結果です。仕事の関係で父と離れて暮らす事になりました。それから3年が経ちますが、父の体の事が心配でなりません。これからは不安でいっぱいですが、自分達にはどうする事もできないので我慢しながら日々の生活を送っています。ふとした時に父の事を思いだしたり、福島の事を思い出したりすると涙することが今でも多々あります。母も同じです。

日本の政府は福島の事を今でも考えてくれているのでしょうか。先の見えない事なので私たちは不安でいっぱいです。一番不安なのは自分の健康の事です。白血病になりたくないです。大人になつたら元気な子供を産みたいです。福島の人だからといって差別を受けたくないです。お父さんといつしょに家族で福島に住める日が来る事を願っています。

地震がおしてくれた事

藤井 彩夏
府中中学校1年

みなさんは覚えていますか。2011年3月11日におきた東日本大震災を。

私の家族はあの日、べつべつに行動していました。とうじの私は小学校3年生でした。妹も保育園に行っていて、父と母は家にいました。その時ぐうぜんおじいちゃんとおばあちゃんも家に来ていたのが不幸中の幸いでした。それぞれがそれぞれの場所で自分たちの時間を過ごしていました。ですがそのときの昼の2時46分に東日本大震災が起きました。学校にいた私はいそいで外にひなんして母のむかえをまちました。家に来た私はしょうげきを受けました。なぜなら私の家から先が下がり、かたむいていたのです。すぐには家の中に入る事が出来ずに今自分の目の前にひろがっている景色にただただ目をうたがいそして何も出来ず立っている事しか出来ませんでした。近じょでもかわらが落ちたりと大変なひ害を受けていました。

私たちは車で夜を過ごそうとしていました。ですが、近くのコミュニティセンターに連らくを取り、私たちをふくむ7世帯がひなんしました。今、自分たちがもっている食料ができるだけたくさんもっていき、電気もつかず、ラジオを聞きながらその日はねむりにつきました。その後も私たちは1ヶ月ほどコミュニティセンターにいました。

そして、家が大規ぼ半かいになり、私たちは家がなおるまでアパートに住む事になりました。

私は、自分がひなんした事や家がこわれた事を体験して、実際に津波で家族がいなくなり、家をなくしてしまった人たちは、どのような生活を送ったのか興味がありました。

そこで本などで調べてみると、津波があった福島では今でも3236人、宮城県では、6387人、岩手県では、4091人の人が行方がわからなくなっています。家族や友人をなくした人たちは、今も帰りをまちづけています。

そのほかにもテレビで見たげんじょうにおどろ

きました。長いひなん所ぐらしが終わって、やつと仮設住宅でくらせる。

しかし、そこには、新たな問題がまちかまえていました。となりの人のテレビや声が聞こえる。となりの人のいびきがうるさくてねむれない。そのような事がつづきストレスをかんじている人もたくさんいました。

では、私たちは復興のために何ができるのでしょうか。

私がおこなっている活動として募金をしています。たった1円でも、10円でもそのお金が今苦しんでる人のそして、未来につながる光になります。なので私たちに出来る事はなんでも行動してみる事が必要だと思います。こうして一歩、一歩進んでいけばきっとものあかるい日本にもどると思います。

あの日を忘れないためにも、一人、一人が力を合せてこれからも、前むきに生きていく事が大切だと思います。

怖かったあの日

山口 真澄
城南中学校2年



3月11日の東日本大震災で私が感じたことが3つあります。

第1に、恐怖です。私たちは校庭で帰りの挨拶をしていました。その時、突然校舎と地面が大きく揺れだしました。私たちは先生方の指示で校庭の真ん中に避難し、集まって自分たちの身を守りました。家に帰ったら、庭のへいや瓦が崩れていきました。もちろん家の中も家具などが倒れていて、とても怖かったです。また、家には私1人だけで、2度目の大きな余震が来た時はどうしていいかも

わからず、怖さのあまり泣き出していました。でも、その後すぐ、父が帰ってきてくれました。夜はいつまた起こるかわからない地震が心配で家では寝られなかったので、車の中で寝ました。何度か余震が起きた時は車にいてもとても怖かったです。翌朝になると余震はおさまっていたので安心しました。電気などが復旧すると、ニュースでは宮城や福島の方がとても大変なことになっていることを知り、改めて地震の怖さを感じました。それまで私は地震を怖いものだと考えていました。けれども、今回の大地震を体験し、考えが変わりました。小さい地震はあまり怖くはありませんが、大きい地震になると日常が壊れてしまいます。

第2に、人とのつながりの大切さについてです。私はこの地震が起きた時、これからどうなってしまうのか不安でした。でも、考えてみると、あの時不安と恐怖で心が折れなかつたのは、周りに支えてくれる人がいたからです。先生や家族が早く来てくれて守ってくれたので、とても安心でした。怖いときや心細い時、近くに誰かが寄り添ってくれるだけで、怖さや不安を打ち消してくれるのだということがこの地震を通してわかりました。

第3に、不便さです。地震のために、水や電気が止まってしまい、夜は非常用のランプとろうそくだけで過ごしました。いつもより暗くて前が見えず、慎重に歩かないといけないので大変でした。また、ご飯も料理も作れなかつたので、2日間非常食を食べて過ごしました。毎日、電気や水などを好きに使っていたので、止まってしまうと不便で大変だということがわかりました。

私は、東日本大震災でいろんなことを考えました。

地震に限らず、災害が発生すると、命に関わる出来事がいろいろ起こります。そんな時に、誰かがそばにいてくれると心強いし、安心できます。それに東日本大震災を体験して、日常の大切さが身にしみてわかりました。もう二度と起こらないでほしいです。

東日本大震災を経験して

柄本 ひかる
国府中学校2年



東日本大震災……。あの日から約3年半が経ちました。他の人に東日本大震災について聞くとほとんどの人が嫌な思い出しかない、と答えるでしょう。でも私は嫌な思い出の中にも私たちが大切にするべき学びもあったと思います。それは他の人を想う気持ちと助け合いです。

私は当時、小学校4年生でした。体育の授業が終わって、次の授業について友達と楽しく話していたその時に、14時46分に地震が起きたのです。

「みんな、机の下に隠れて！」と、担任の先生が言いました。そして避難するときに危険がともなわないよう、金魚が入っている水槽を必死に押さえていました。何回もその大きな揺れが続きました。しばらく経って校長先生が、

「外に逃げろー！」と、叫びました。早く逃げなければ、とみんな必死に避難しました。外に出ると低学年の子も高学年の人もほとんどが泣いていました。中には家族を求めて泣き続ける子もいました。

「お母さんやお父さん……家族のみんなは無事かな？ 早く会って元気な姿を確認したい。」

その時の私の想いはきっと他の人と同じだったでしょう。私はいつでも、どんな状況でも家族や他の人への想いは変わらないのだなとこの時、実感しました。

また、東日本大震災からしばらく経ったある日、テレビを見ているとある特集を放送していました。それは外国人の人たちが日本に助けに来てくれたという内容でした。

地震が起きたとき、あるお母さんが海外にいる息子に、

「もうだめかもしれない。」
と、メールを送りました。すると、息子は、海外の多くの人に、日本で大変なことが起きていた、という情報を広めました。大震災だということが分かり、海外の助けも必要だと思ったからです。この情報が広がり、海外からの救助の手が日本に差しのべられました。

救助に来てくれたある国は東日本大震災が発生する前に災害が起きて、日本に助けられたそうです。そして今度は自分たちが助ける番だ、と思って、その国が来てくれたのだと知り、人が生きていくためには助け合いが欠かせないんだと思いました。

東日本大震災を経験して私は、辛い時こそ「人を想う気持ち」と「助け合い」が大切だと学びました。これからは「人は人の支えがあって生きている」ということを忘れずに生活していきたいです。また、この学んだことを次の世代に伝えていきたいと思います。

地震の怖さ

小牧 飛鳥
園部中学校1年



2011年、3月11日。当時、小学3年生だった私は、教室で1年間の作品をまとめました。習字や作文を返されている時、地震速報が流れました。私は何日か前にも何回か小さな地震があったので、今日も小さいだろうな。と思いながら机の下にもぐりました。速報では震度3となっていましたが、だんだん揺れが大きくなっていました。するとテレビの前の机の下で身を守っていた男の子が、

「テレビが落ちてくる！」
と言いました。その時、担任の先生はおらず、私はただ机にしっかりとつかまっていることしかできま

せんでした。揺れがどんどん大きくなり、テレビが落ちてしまう。そう思った時に、先生が走ってきてテレビをおさえてくれました。しばらくして、揺れがおさまった頃に、先生が、

「静かに並んで、外へ避難してください。」
と言い、私はガクガクしながら皆と一緒に避難しました。他の学年の皆も早く避難することができ、避難訓練をして良かったと思いました。グラウンドに集まり、学年ごとに座ると地面がまだ揺れていたので、とても怖かったです。周りの皆が校舎を見ながら、

「二宮金次郎の像が折れてる！！」
と言っているのが聞こえました。二宮金次郎の像を見るとひざのあたりから折れ、地面に倒れていますが分かりました。私が恐怖で泣き出すと、友達や男の子が大丈夫だと背中をさすってくれたのを覚えています。その数十分後、また教室に一度戻り荷物を持って、グラウンドで保護者の迎えを待ちました。その間も何度も余震がありました。しばらくして、父が迎えに来てくれました。帰り道、家の塀が倒れたり、瓦が割れているのを見ました。

家に帰ると、壁にヒビが入っていたり、食器が割れたりと、大変なことになっていました。その夜はガスコンロでお湯をわかし、簡単なスープや、炊飯器の中に残っていたご飯を食べて過ごしました。朝になっても停電したまま、いつまで続くのかな。と思っていました。数日後にやっと電気が使えるようになりました。テレビをつけるとそこには、津波の映像が流れていきました。車や家が流され、多くの死者が出たことを知り、とても怖かったです。

私はこの東日本大震災で命の大切さと、地震の怖さを改めて知りました。この経験を忘れないよう、もしもまた大きな地震が来た時には、どうすれば良いか、冷静に判断できるようにしたいです。

あの日

鈴木 美紗都
八郷中学校1年



2011年3月11日午後2時46分。あの日、東日本大震災が発生しました。あの時、私は、教室にいました。オープンスペースをいつもの金曜日と変わらず歩いていたら、

「ドカン。」
という今まで体験したことのない直下の地震がありました。しかし、私は
「また、いつもの少しうれおわるんだな。」
と甘く見ていました。すると急に、

「ガタガタガタガタガタ。」
と激しいゆれが2分間も続き、私はおどろきと共に恐怖を感じました。当時私は小学3年生だったので何が起きたのか分かりませんでした。教務主任の先生もおどろいた様子で、「地震です。地震です。ただちに校庭の真ん中へ避難してください。」と放送していました。校庭へ避難すると、地割れになっている、校舎の屋根のかわらが落ちてくる、体育舎が少しかたむいているなどのひ害を受けました。そして、校舎内でも、いくつかの教室のテレビが落下する、校舎本体にひびが入などのひ害も受けました。避難している途中も大きな余震がありました。校庭で避難しているときも余震があり、下級生も先輩方も泣いていました。ようやく、まちコミメールも送信でき、次々に迎えが来て、私もすぐ車の中へかけ込みました。家へ帰ると、たんすは倒れ、仮だんもごちゃごちゃでもう何が何だか分からず、停電した暗い一夜を過ごしました。

翌日もやはり余震が続きました。正直、いつもれるかも分からず怖かったです。その日は、一日中家で過ごし、身をひそめました。

そして午後4時ごろ水や電気も復旧し、ようやく

いつもの暮らしに戻りました。しかし、東北で10メートル以上の津波で何千人の人が流され、亡くなってしまい、ひさんだと思いました。

この、東日本大震災を経験して、もうこんなに死者、行方不明者、けが人を出すような災害は起きて欲しくないと思いました。そして、もし大きな災害が起きたとしても、私自身も気を付けたいと思います。